国内研修成果報告書

「三重県答志島地域での子育てと社会的な親としての寝屋親制度」

期間：2025 年 8 月 11 日～13 日
場所：三重県答志島答志、和具
参加人数：3 人

8 月 11 日から 13 日の三日間、国内研修制度を利用して三重県の答志島に訪れた。目的は「地域福祉入門」の授業内で野田先生より紹介された寝屋親制度について当事者から話を聞き、理解を深めることだ。この地方特有の社会的な親を作る制度で、昔は一つの家に 7 人ほどの男児が集まり就寝のみを共にしたそうだ。しかしながら島全体の人口は令和 4 年 2 月末時点で 1861 人であり、今回我々が訪れた答志、和具地区のみに絞れば 1300 人ほどだ[1]。子どもの人数もかなり減っている。それゆえ当制度は一軒あるかないか、それも子どもは 1 人とのことだ。そのため今回は必然的に過去に寝屋子、寝屋親だった島民に話を聞く形となった。以下、今回の動きの詳細である。

島には鳥羽と離島を繋いでいる船で向かった。答志島の船着場には 11 日の午後到着し、そこから歩いて 10 分ほどの「くつろぎの宿美さき」に直行した。従業員用の部屋に泊めていただく予定だったが、ご厚意により客室をご用意くださっていた。到着すると既に部屋には布団が敷かれており思わぬ宿泊客同然の扱いに驚いた。部屋で少しゆっくりしてから橋本たかしさんにインタビューの時間を取っていただいた。17:30~18:15 の約 45 分お話しを伺ったが、その内容はまとめて後述する。インタビュー後は橋本さんの勧めで「まるみつ寿司」に電話をかけ、夕食の席の予約を試みたがあいにく席は空いていなかった。その際私たちが素泊まりで美さきさんにお世話になっている旅行者だと認識されているとわかった。 島内の情報網に驚いた。さらに驚いたのは、テイクアウトでお願いしたにも関わらず車で持ってきてくださったことだ。電話で「用意ができたら電話するから通りに出ておいて」と言われた時は三人で店の前の道なのか旅館の前の道を指しているのかわからず電話が来るまで議論していた。結論旅館で待っていて正解だったのだが東京では起こり得ないことに連続で遭遇ししばらく興奮が冷めなかった。夕食の寿司を宿の部屋で食べてからはお風呂に入り、22 時という大変健康的な時間に就寝した。

---

[1] 鳥羽市 HP 答志島
https://www.city.toba.mie.jp/soshiki/kikaku_keiei/gyomu/seisaku_keikaku/rito_shinko/2019.html 最終閲覧日：2025/09/01

2日目は朝9:30からの手伝いで始まった。内容は部屋の掃除やベッドメイキングなどが主であった。旅館の客室準備など初の体験であったがベテランのパートさんに教えてもらいながらだったため困ることはなかった。パートさん達のお茶休憩にも混ぜてもらい、女性からみた寝屋親制度について話を聞くことができた。12:30には午前中の手伝いが終了し、旅館から徒歩10分くらいの「喫茶みはま」で昼ごはんを食べた。橋本たかしさんから伺った「ねやこや」に向かう道中、鳥羽市役所の出張所を通りかかった。そこではもう寝屋子の制度を実践している宅はないと言われが、職員の方に教えてもらった「マルキ」に向かった。マルキの店主にお話しを伺っている最中に「マルハ」のバ息子さんがバイクで通りかかった。マルキの店主に促されその息子さんに今回の研修の目的を話すと「自分の父に聞いた方がいい」とのことだったためすぐ近くの「マルハ」に入り、店主に事情を話した。5分ほど話を聞いた後私たちはそこでそれぞれ海苔を購入してその場を離れた。その後はみたらし神社など、気ままにも寄り道しながら「ねやこや」に向かった。ねやこやでは偶然居合わせた「島プロジェクト」の大学生にお世話になった。特に国立大学2年の男性はご自身の人脈を紹介してくれるなど、とても親身になって協力してくれた。その方のご厚意に甘えるようにして休憩中の漁師さんにインタビューをさせてもらう機会を得た。その後島プロジェクトin答志島の代表の女性、同国立大3年の女性の計らいで濱口市議会議員にお話を聞くことができた。手伝いの時間を見越して「八百安」で翌朝のご飯の買い物をし、19:00に手伝いを開始した。手伝い終了後は昼ごはんを食べた「みはま」にいき、夜ご飯を食べた。東京での選択肢の多さを強く実感した。

3日目は8:00からお手伝いが始まり、12:30には終了した。その後長岡さんの取り計らいによりねやこやで90歳の中川秀男さんにインタビューができた。当初の予定ではその後出航時間までに首塚に出向くことになっていたが天気と時間の兼ね合いで行けなかった。雨予報だったにも関わらず奇跡的に私たちの外出中に雨が降ったのは三日間でこの瞬間だけであった。

インタビューで印象に残った点について記述する。まず一つ目は人によって当制度の現状について認識が違う点だ。現存していないという人もいれば、1人や2人預かっている宅を知っていると言っている人もいた。おそらく和具と答志で状況が違い、答志島にはまだ存在する一方で和具ではもうないということなのだろうというのが私たちの解釈だ。橋本さんへのインタビューの中でも「繋がりが煩わしく感じる時もある。しかし制度自体はあった方がいい」という言葉を聞いた。少子高齢化と資本主義経済の影響を強く感じ、寂しい気持ちになった。けれど、一番楽しかった思い出について聞くと例外なく「大人になってみんなで集まり、お酒を飲みながら近況報告をすることだ」という、寝屋子を出てからについての答えが返ってくることには笑いが漏れた。それだけそれぞれが自立してからの繋がりも強く、寝屋親との縦の繋がりのみ

ならず「朋輩」[2]との関係性も唯一無二のものとなるのだろう。制度に関する新しい知識としては、寝屋子側の親が頼む先を他世帯と相談して決め、依頼を受けて寝屋親になるということだ。伝統や住んでいる場所、またはや寝屋親の立候補によって決まると思っていたため正しい知識を得られてよかった。また、寝屋子になる利点として特筆すべきは年相応の育ち方ができるということだろう。肉親とは違う社会的なオヤのもとで一定期間同世代の島民と一緒に世話になることで年齢に見合った育ち方ができたと感じているとの話は大変印象的であった。

今回の研修旅行において寝屋子制度以外にも印象に残ったことは数多くある。まずコンビニやスーパーが徒歩圏にないことの不便さ、あるいはあることの便利さだ。鳥羽から船で通っているパートさんがいるなど、船を使うハードルは私たちが思っているより格段に低いのは事実だろうが、船で鳥羽まで出なくては手に入らないものの方が多いのだ。我々が普段暮らしている場所の便利さと地域間の差を痛感した。島内はバイク移動が主流だと見える。車も走行しているが、多くはトラックなどの業務用のものだった。自家用車は鳥羽に駐車していることが多いとのことだ。バイクは無防備においてあるように思えるが島内は皆顔見知りで情報が流れる速さは尋常ではないためバイクの盗難などの犯罪行為は不可能に思われた。たとえ盗難したとしても島外に持ち出すこともできないだろう。実際にインタビューの中には島のいい点として「全員が顔見知りで悪いことができないから安全」という話もあった。

今回の研修旅行の個人的な反省としては出しゃばりすぎたことだ。それぞれの考えがあるとはわかっていたにも関わらず、一方的に否定したり指示を出したりといった行動を自覚している。全体の反省としては、計画性がなかったことだ。本来であれば、三日間の計画を事前に決め、夕食のことなども考えておくべきだったのではないだろうか。行き当たりばったりの旅行になってしまったため、いくべきだった場所も行きそびれているかもしれない。また、先方とのやりとりなどを１人に任せすぎたことも反省している。しかしこちらの連絡先を伝えている以上、連絡を請け負う人は一人となる。こういった場合の役割分担は大変難しい。今後は以上の反省を生かしていきたい。また、三月には海苔作りの体験ができるとのことで、お誘いいただいたため、また島にいく予定だ。そこで今回解明しきれなかった、いかにして寝屋親制度が生まれたのかについて調べたい。

今回は授業で事前学習が済んでいたため、大方の知識はあった上で研究にいった。しかし当事者の人やその周辺の人とその場に行って直接話すことで、知識以上のものを得られた。知識として学んだことを現実のものとして捉えられるからだ。経験を伴

[2] 同じ寝屋親のもとで育った仲間のこと。互いに呼び合う際にも使用していたとのこと。

った世界が広がったと感じている。国内研修の制度がなければ行かなかったかもしれないと考えるとこの学部の当制度には感謝したい。また、お誘いいただいた三月の海苔作りの体験にはぜひ行きたいと考えている。私はお声かけいただいたことには全力で参加するようにしている。どんな経験でも無駄なことはないと信じていることに加え、人とのつながりは何をする上でも欠かせない大切な要素だと今回の研修で再認識したからだ。今回の研修旅行の経験や反省を生かしこれからも様々な知見を得、その学びを社会に還元していきたい。